『ＲＩＲＩ流通産業』第20巻第4号（通巻 162号）
1988年4月号　流通産業研究所

1988-4

FORUM 3

消費文化

トロンと「純粋」資本――あるいは，「消費の恋の物語」の終り

橋爪大三郎
（はしづめ　だいさぶろう・社会学者）

もともと一体だった人間が，ふたつにひき剝がされた。だから男女は失われた半身を，永遠に求めあう。――こうのべたプラトンが正しいのなら，それ以上に生産と消費こそ，かつて一体のものだった。いまは互いに半身に別れ，のこる分身を熱烈に求めあっている，と言わねばなるまい。

恋愛にも匹敵する狂おしい情念が，苛烈な火花を散らす場所，それが市場である。自給自足の安穏は，そこにない。かたや，先払いした資金を市場で回収できなければ存続すらおぼつかない企業。かたや，生産に依存しない限り生存もままならぬ消費者。しかもこの市場たるや，抜け目のない恋敵にあふれている。

女が自分を恋する男より優位に立つように，消費者も企業の優位に立つ。生産過程は技術的にコントロールできる余地が大きいので，生産力は飛躍的な拡大を遂げてきた。かくて逞しい男たちが，女の窓の下に列をなす。かき鳴らすギターの爪弾きは，電通か博報堂仕込みか。しかし女（消費）はしょせん気まぐれ。解読不明の意味のシステムである。

*

ところで恋の鞘当てに，仲介役が不可欠なように，生産と消費をとりもつ市場にも，第三の要因が微妙に介入するだろう。そう，貨幣！　そもそもこの「恋の切札」がなければ，市場も身動きとれないではないか。

消費は元来「人間がモノを享受する」，そういう単純ないみだった。ところが産業社会ではこれが，「生産物が市場で売れる」にすりかわる。売れるか売れないか。消費の恋物語は，急に現金な筋立てになる。

この筋立てを，もう少し追ってみよう。

貨幣論。貨幣は経済の立役者だ。が，貨幣を主役にした経済学の完全版は，おかしなことに今もって存在しない。リカルドは何と言った？　金が国際通貨なら，貿易が自動的に均衡します。マルクスは？　金＝貨幣は，労働価値を体現する商品（一般的等価形態）です。ウェーバーは？　割引手形の制度が，資本主義貨幣の秘密です。じゃ，ケインズは？　貨幣市場では，利子率以外に流動性選好も大切です。なるほど，しかしそれだけ。そこで実務家は，昔ながらの貨幣数量説を，ちょっちょっと手直ししては，その場をしのいでいる有様だ。

なんで手直しが必要かというと，貨幣は実物商品じゃなくて，一種の制度だからである。制度が変質するたびに，貨幣の運動法則もその分だけ変化していく。

いまの理論経済学は，ワルラスのモデルによっている。で，ワルラスが「純粋経済学要論」でどう言ったかというと，一般均衡を扱うのは難しいから，交換→生産→信用→貨幣の4段階で進めましょう。それはいいが，話はいまもって，生産の一般均衡の先でストップしたまま。貨幣の一般均衡なんて，全然研究されてない。つまり，貨幣の作動を織りこんだ資本主義経済の理論は完成していないので，これじゃ消費の本当のところは分析できるわけがない。

*

経済学は当分，期待薄である。そこで誰が消費を論じても，手探りになってしまう。素人も学者も，差がないんだから仕方ない。

* TRON And The "Pure" Capitalism : or the End of the Lovers' Story of Consumption　by　Hashizume, Daisaburo 1988

企業のための，消費の恋の物語。他愛もない恋占い。もうあらかたは，語り尽くされた。いや，それでも，種はつきないらしい。

そういうのは聞き飽きたろうから，違う話をしよう。貨幣が変質すれば，消費も変化する！

オンライン→ネットワーク→ICカード→……と進行中の情報化。ますます拡大する電磁技術の先端で，貨幣の制度が変質する。

情報化以前，貨幣は位階秩序を作っていた。現物貨幣（管理通貨）を調節する中央銀行。それに対して支払の実態は，預金通貨（商業銀行が信用に応じて貸付けた口座勘定）だ。両者は「準備」の関係で結びつく。この統制が効くことが，金融政策の前提である。

こういう貨幣の支払には一定の時間がかかった。流体の"摩擦"みたいなものである。電磁技術はこれをスムースにしてしまう。これだけで貨幣はかなり膨張する。しかも同じ技術が，債権（特に短期資金）と現金（預金）の互換性を高め，債券市場と貨幣市場を連続させてしまう。当然，いろんな変化がおこる。まず，購買意欲の季節変動（ボーナス効果等）が平準化する。高級品が高所得者層によく売れる。財テクに出動する資金量が急増する。……。

こんなの教科書に出ていなかった，と言いたもうな。ワルラスのモデルは，理想化された競売買（チケットによる先物取引）市場だった。"摩擦"が除かれたおかげで，彼の「純粋」経済に一歩近づいた，とも言えるのだから。

*

だがこんなのは，まだ序の口。いずれ消費の恋の物語など，ふっとんでしまうのだから。

電磁技術が浸透するのは，まず生産過程。そのあと市場（貨幣と流通）→消費の順だろう。

昨年ニューヨークの株価暴落の一因は，コンピュータのプログラム売買だという説がある。株式の需給は，貨幣・債券市場と連動している。しかもその売買が，機械化・自動化された。その結果だとしたら，これは重要な兆候だ。

流通への電磁技術の浸透を考えよう。

流通の理想は，在庫・返品ゼロ，経費最小である。その極は注文生産にほかならない。あらかじめモノを造って在庫してしまうから，広告の出番があった。が，大量生産→多品種少量生産→カタログ販売→……の行き着く先は注文生産である。本のような情報財，衣料品，調度，……の順でそうなるだろう。こうなると「広告したものは売れない」が鉄則になりかねない。

流通段階にとどまらず，家庭にまで入りこんだ電磁技術は，消費の機械化・全自動化（ホーム・オートメーション）を達成するだろう。トロンの狙いも，じつはここにある。

初めは，台所から。松下や日立あたりが「しとやかさん」「気がつく君」などを売り出す。「彼女」らは，調理技術のみならず，音声応答システムを具え，家族の健康データ，新製品の知識や市場動向も掌握している思考マシンだ。「そろそろお正月だから，おせち料理の準備しときましょうね。」なるほど，これは便利だ。「糖が出てましたから，来週，人間ドック予約しときました。」そりゃご親切さま。

どういう財とサーヴィスの組合せが，いちばんあなたを満足させるか，学習システムで覚えこんだ「彼女」らは，あなたに代わって商品を注文する。株式ならぬ，消費財全般の購入がプログラム化されてしまったら，販売戦略や広告は誰を相手にしたらいいのだろう。

しかし，そう心配することはない。資本主義の「純粋」でなかった時代，消費の恋の物語が終ろうとしているだけだ。モノを造るより売る方が難しかった時代。そのあとに，モノを考えつくのがいちばん難しい時代がくる。

生産～流通～消費を貫通する電磁技術。恋が成就したあかつきに，生産と消費は再び合体をとげる。そこでは「頭のいいソフト」が経済に君臨する。このときワルラスの描いた「純粋」資本主義経済がやっと現実のものとなり，彼の一般均衡論も完成に近づくんじゃないか。

原題：「トロンと「純粋」資本主義――あるいは、「消費の恋の物語」の終り」